

博士論文(要約)

南仏ラングドック地方の家畜放牧と 共同体領域の歴史的研究 (16～18世紀)

小島 見和

本研究は、南仏ラングドック地方で諸共同体が維持してきた放牧領域、すなわち諸共同体がその範囲に放牧権を行使してきた領域を具体的に明らかにし、放牧領域とそれに関わる諸問題のケーススタディを通じて共同体の権利と権威にとって放牧活動がどのような意味をもっていたか論じる。課題は以下の4点である。

1点目、南フランス広域を16世紀から18世紀という長期にわたって見たときに、その中のさまざまな地域的特性に応じてどのような放牧問題の傾向が存在したのか、また近世社会の変動と放牧問題はどのように結びついているのか、俯瞰的に明らかにすること。具体的には、先行研究からラングドックでは18世紀まで強制共同放牧が残ったとされていることを確認したが、悉皆的史料を見たときどの程度残存したといえるのか確かめる。また、強制共同放牧の問題に限らず、近世において土地利用の意識に大きい変質が生じたのはいつ頃どのような理由によるものか、考察したい。

2点目、共同体の領域と家畜放牧はどのように関わっていたのか明らかにすること。つまり、共同体の領域にとって家畜放牧はどの程度強い規定要素であったのか明らかにすること。これは取り上げる共同体によって異なることが予想される。

3点目、放牧問題に限らず、人々は領域をどのように認識し、表象していたのか明らかにすること。とくに視覚的表象である絵図に着目し、描かれた要素を細かく分析することにより、何が境界とされたのか、その領域の主体（領主や共同体など）はどんな意図をもって領域を表象したのか考察する。

4点目、共同体の領域の複雑性およびダイナミズムを明らかにすること。領域というものにはかならず主体がおり、決まった者にそこに入ること、そこを利用することを許可する一方、それ以外の者を拒む排他性をもっている。スケールの異なる領域を史料の中を探し、その運用の実態を探る。

これらの課題に答えるため、本研究は次のような構成をとる。

序論

I 南仏の放牧問題

I 序

第1章 放牧紛争の分布地図：地理的分析

第2章 放牧問題の主体と内容の詳細

第3章 放牧問題の変容：通時的分析

I 小結

II 領域・表象・放牧

II 序

第4章 アルビジョワ地方およびナルボネ地方の地理的枠組みと中近世の土地利用

第5章 紛争と絵図

- 第6章 アルビの領域紛争と絵図
- 第7章 ナルボンヌの領域紛争と絵図
- 第8章 複層的な放牧領域

II 小結

結論

大きくは、序論、第I部、第II部、結論からなる。序論では、すでに述べた関心の所在に沿って研究のタイムスパン、地域的枠組み、農業・牧畜の一般的歴史、方法と史料を示し、先行研究を整理し本研究の位置付けを試みる。「I 南仏の放牧問題」では、アンシャン・レジームのラングドック地方とおおむね重なる範囲を管轄していたトゥールーズ高等法院の文書を用い、幅広い地域の放牧問題を悉皆的に収集し、数量的に読み解くことで1点目の課題に答え、2点目の大きな見取り図を描く。「II 領域・表象・放牧」では、アルビジョワ市とナルボンヌ市にあった領域紛争に関する中近世の絵図分析、それから近世に周辺地域で起こった放牧紛争史料の分析を通じて、共同体の具体的領域について考察し、2点目から4点目の課題に答える。